

## Sunday In New York

ニューヨークの休日

### Eric Alexander Quartet

エリック・アレキサンダー・カルテット

- ニューヨークの休日**

Sunday In New York ( P. Nero )( 8：51)
- アパーチャ**

Avotcja ( J. Hicks )( 8：53)
- ディアリー・ピラブド**

Dearly Beloved ( J. Kern )( 6：38)
- ライク・サムワン・イン・ラブ**

Like Someone In Love ( J Van Heusen )( 6：22)
- ウォッチ・ホワット・ハプンズ**

Watch What Happens ( M. Legrand )( 7：12)
- マイ・ガール・イズ・ジャスト・イナフ・ウーマン・フォー・ミー**

My Girl Is Just Enough Woman For Me ( D. Fielde, A. Hague )( 8：14)
- アローン・トゥゲザー**

Alone Together ( A. Schwartz )( 7：27)
- マイ・ロマンス**

My Romance ( R. Rodgers )( 8：30)

**エリック・アレキサンダー** Eric Alexander { tenor sax }

**ジョン・ヒックス** John Hicks { piano }

**ジョン・ウェバー** John Webber { bass }

**ジョー・ファンズワース** Joe Fanrnsworth { drums }

録音 : 2005年3月18日　  *アヴァター・スタジオ*、ニューヨーク

© 2005 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

\*

Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan.
Recorded at Avatar Studio in New York on March 18 , 2005.
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound : Shuji Kitamura and Tetsuo Hara.
Artist Photo : Mary Jane Rosen.
Cover photo by Wakana.
Designed by Taz.

テナー・サクソ界の若い世代を代表する一人、エリック・アレキサンダーが日本のヴィーナス・レーベルに移籍したというニュースは朗報だった。このアルバムは昨年（2004年）の「ジェントル・バラッズ」に続くエリック・アレキサンダーのヴィーナス移籍第2弾ということになる。前作は、タイトルどうりマル・ウォルドロン<レフト・アローン>やピリー・ストレイホーン<チェルシー・ブリッジ>などバラード曲にスポットを当てたバラード・アルバムだったが、この新作はいわゆるスタンダード曲を中心にダイナミックにスイングする痛快なストレート・アヘッド・ジャズになっている。エリック・アレキサンダーとここで共演しているミュージシャンたち　ジョン・ヒックス（ピアノ）、ジョン・ウエバー（ベース）、ジョー・ファンズワース（ドラムス）　はリーダーのエリックとは普段から共演を続けてきた気心の合った音楽仲間たちであり、それだけに、どの演奏も、見事に呼吸が合っていて、音楽が生き生きと躍動しているのは聴いていて爽快だ。

エリック・アレキサンダー（1968年8月4日、イリノイ州の生まれ）のことをはじめに「テナー・サクソ界の若い世代を代表する一人」と書いたが、実際、近年のエリックは、ダウンビート誌恒例の「国際批評家投票」でもテナー・サクソの“ニュー・スター”部門で常に上位にランクされている。ちなみに過去5年間の同投票の結果を調べてみると、2000年度、エリック・アレキサンダーは、1位のクリス・ポッター、2位のケン・ヴァンダーマーク、3位のジェームス・カーターに続いて第4位だった。それが2001年度になると、1位=ポッター、2位=ジェームス・カーターに続いて第3位に浮上し、2002年度も第3位を堅持して、2003年度と2004年度は1位のポッターに迫って堂々第2位につけているのである。

このところ同投票の“ニュー・スター”部門で上位に名前を連ねているテナー・サクソ界“若手”の年齢を調べてみると、トップのクリス・ポッターは1971年生まれで34歳、エリック・アレキサンダーは1968年生まれで36歳、このほかマーク・ターナーは1965年生まれで39歳、ハリー・アレンは1966年生まれで38歳、ダヴィッド・サンチェスはエリックと同じ1968年生まれで36歳だ。こうした若手グループのなかで、エリック・アレキサンダーに特別な期待がかかるのは、この10年間を通じて彼が見せてきたミュージシャンとしてのめざましい飛躍ぶりによっている。もともとジャズ界が最初にエリックの存在に気が付いたのは1991年に実施された「セロニアス・モンク国際ジャズ・コンペティション」(テナー・サクソ部門)で、優勝したジョシュア・レッドマンに続いてエリックが第2位に入賞したのがきっかけだった。その翌年にシカゴからニューヨークに進出したエリックは、たちまちホットな注目を浴びる存在となり、以来、年に1枚のペースでアルバムを発表（デルマーク、クリスクロス、アルファ、マイルストーン）しながら、着実に上昇気流にのって、“若手のなかのベスト”という評価を築き上げてきた。その成果は、ダウンビート誌の国際批評家投票結果にも如実に表れているといっていいだろう。

この新作を聴くと、エリック・アレキサンダーがテナー・サクソの巨人たち、ソニー・ロリンズ、デキスター・ゴードン、ジョー・ヘンダーソン、ジョージ・コールマン、ジョン・コルトレーンらを熱心に研究した痕跡を認めることができる。実際にエリックは影響を受けたミュージシャンについて「カレッジ時代によく聴いたミュージシャンたちが、今も私のインスピレーションの源泉になっている。例えばモンク、ガレスピー、ソニー・ステイット、クリフォード・ブラウン、ソニー・ロリンズ、ジャッキー・マクリーン、ジョー・ヘンダーソン、それにチャーリー・パーカーとビバップ時代のパイオニアたちが残してくれた音楽遺産が私の基盤になっている。そのほかジョージ・コールマンのカッコいいハーモニックなセンス、ジョン・コルトレーンの音楽　それらがすべて私の音楽の滋養になっている」と語っているほどだ。

1993年にエリック・アレキサンダーのアルバム吹き込みに参加して以来常に行動をともにしてきた無二の音楽仲間である。

1) ニューヨークの休日

ポップ系のピアニスト、ピーター・ネロが作曲した映画の主題曲。ジャズ・ミュージシャンが演奏するのはきわめてめずらしい。60年代にスタンリー・タレンティンがブルーノートに録音しているほかは、90年代にラルフ・ムーアが録音している程度で、テナー・サクソ奏者によるレコーディングはほかにない。エリックのカルテットはミッド・テンポでグルービーにスイングする。ソロはテナー・サクソとピアノがとる。

2) アヴァーチャ

ジョン・ヒックスのオリジナルで、1989年にドラマー、マイケル・カーヴィンのアルバムに参加した際に提供したのが初演。ヒックスが参加した1990年のチャールス・トリヴァーを中心とした「ザ・リユニオン・レガシー・バンド」による録音もある。“アヴァーチャ”とはガール・フレンドの名前。アップ・テンポの演奏で、ヒックスは自作曲を熟っぽく弾いている。ピアノ・ソロに続いてテナー・サクソのソロが登場する。この演奏にはデキスター・ゴードンのスタイルが読み取れる。続いてベース・ソロも登場する。

3) ディアリー・ピラヴド

ジェローム・カーンの曲が速いテンポで演奏される。この曲はジョン・コルトレーンやソニー・ロリンズも演奏しているが、エリックの演奏は、なかでは最も速いテンポのヴァージョンになっている。イマジネーションが沸々とわき出ている感じで、ソロの後半で、エリックは技巧的なブレイに突入する。ストレートアヘッドな痛快な演奏だ。ヒックスもエキサイティングなソロを弾く。ドラムスとベースが送り出すスイングもチャージがかかっている。メンバーは長年共演している間柄だけに一丸となった見事な協調ぶりが示される。

4) ライク・サムワン・イン・ラブ

ここでバラード演奏が登場する。それもテナー・サクソとピアノだけによるデュオ演奏。エリックはソニー・ロリンズのような太くたくましいテナー・サクソのサウンドを聴かせる。サクソに続いて登場するジョン・ヒックスのピアノ・ソロも心にしみいる情情豊かな演奏だ。

5) ウォッチ・ホワット・ハプンズ

ミッシェル・ルグランの曲。ソリッドなスイング・ビートに乗ってエリックがソロを先発し、ヒックスが続く。エリックが再びメロディを奏でて終わる。

6) マイ・ガール・イズ・ジャスト・イナフ・ウーマン・フォー・ミー
テナー・サクソのスタンリー・タレンティンが60年代に2回も録音（1960年にTimeレーベルに、1964年にはブルーノートに録音）しているほかは、すべてのバージョンを含めてもたった6回しか録音されていないというジャズでは滅多に演奏されない曲である。このことからエリックが密かにスタンリー・タレンティンを研究している形跡を察知することができる。この演奏からはじっさいにタレンティンの影響も感じられる。ここでもジョン・ヒックスのピアノ・ソロはホットに燃えている。後半ではサクソとドラムスの掛け合いも登場する。

7) アローン・トゥゲザー

ストレートアヘッドな演奏。ベースとドラムスが心地よいクッションを生み出している。エリックのテナー・サクソはよく歌っている。ピアノ・ソロに続いてドラムス・ソロが登場する

8) マイ・ロマンス

アルバムのラストはバラード演奏。ハート・ウォーミングなテナー・サウンドで、エリックはよく歌っている。アルバム中のハイライトの一つといっていい名演奏で、ラストを飾っている。

児山紀芳（Kiyoshi Boxman Koyama）